

# 魯迅とその周辺の人びと

——日中関係比較の視点から——

徳永重良

プロローグ

1. 魯迅と周作人が翻訳した日本の小説
2. 周作人についての素描
3. 魯迅と芥川龍之介
4. 魯迅「藤野先生」と太宰治『惜別』

エピローグ

## プロローグ

日中両国の関係・交流は、非常に長きにわたる歴史を有している。いま古代の、宋への遣使朝貢がはじまり（460年）、仏教伝来の頃（6世紀）を起点と考えると、この歴史はざっと1500年の長い期間にわたる。当然のことだが、中国はより高度で洗練された文化をすでにもっていた。だから古代、中世をとおして、日本は、遣宋使、遣唐使を派遣し、中国からの文化の移入・摂取に努めたのだった。中国は長い間日本にとってまさに“モデル”であった。

この関係史は、文化的に中国の圧倒的な影響下にあったことは言うまでもない。このことから、日本文化は「模倣文化」にすぎないという俗説——いまでも時折それが表面化することがある。とくに両国関係が緊張した場合に——が生まれてくる一因だが、それが皮相な見方であることは指摘するまでもない。

しかし文化・制度の移入は決してデメリットばかりではない。文化の移入により後発国は当然ながら先進国の制度や成果をより早く採り入れ、短期間にレベルアップを図ることが出来るからである。さらにこの過程に付随して、移入の仕方に習熟し、それをある種の経験として蓄積し、自国の環境条件に合うように改良を加えることにもつながる。またそのことは、つぎのことを考えると無視できない重要性をもつものである。すなわち、あとでも触れるように、中国にはそもそもそのような必要性が乏しかったので、清朝末期に海外から文化の移入・摂取をはかること、つまり社会の近代化を図るさいに多大な犠牲と遅れ、混乱とを引き起こすことになったのである。

日本が外国（ここでは中国）から文化の移植をする場合、とくにつぎの二つの点に留意する必要がある。一つは、マックス・ウエーバーの用語を借りれば、日本側に「選択と適応」（Auslese u. Anpassung）というべき行為が明白に働いたことである。制度、文化は全面的な受容、たんなる模

倣だけでなく、大体において日本の条件に適合するもののみが選択され、さらにそれらは歴史の中で淘汰され、適応しつつ定着してきたのである。

二つには、モデル役割国の交代である。阿片戦争は、西欧列強のアジア支配をまざまざと見せつけた。いかにして欧米による支配、隷属を防止し、回避できるのか——これが日本の反応であり、人々に抱かれた深刻な危機感であった。日本のモデルはもはや中国ではありえない。西欧先進諸国がそれに代わった。

ついで中国の近代化の孕む問題をごく大まかに俯瞰しておこう。長い歴史をもつ中国が、この大転換を遂げるには大きな困難があった。あらゆる分野で自国の圧倒的な優位性が長期間維持されてきたので、外国の固有の文化や制度を学び、導入する必要性はそもそも乏しかった。いわゆる中華思想は、周囲の諸外国を東夷、西戎、南蛮、北狄のように、遅れた、未開の国と見なし、自国を優れた中心的な存在とする自己認識である。このような考え方が、旧社会を改革し、近代化を進めるうえで強固な阻止要因となったことは言うまでもない。清朝末期、さまざまな近代化のための改革案が提起されたが、そのうち実施されたものは少なく、結局、抜本的な改革はすべて蹉跎した。

日中関係の歴史からみて、この点について決定的な転換点は、日清戦争と清国の敗北であった。清国政府は改革を、より本腰を入れて実施し、促進せざるをえなくなった。その際、明治維新の成功と、短期間で軍事力を増強した実績が目ざされ、日本が西欧と並んで中国の改革モデルの一つと見なされるようになった。

重要な変化として日本への清国留学生の派遣があげられよう。最初の数名から一時1万人以上に達した。まさにブーム現象の感を呈した〔北岡政子（2001）；柴崎信三（1999）など〕。国内の大学がまだ整備されていない以上、高等教育を目指すものにとっては、海外留学しか途はなかった。数世紀の歴史を持った科挙はもはや形骸化し、1905年に廃止された。そして費用の安さ、地理的便利さ、張之洞らのようなリーダーの奨励もあって日本への留学が人気をよんだ。日本留学生が帰国後各界で地位を得、活躍したことを考えると、この制度のもつ意義は大きい。

ところで、筆者はこれまで魯迅の文学活動と思想の特質の一端を、おもにその社会的背景との関連の中で論じてきた。本稿ではそれらとやや分析視角を変えて、魯迅を中心とすると彼の「周辺」に位置する作家ないし文人を数人選び、彼らの魯迅との関係、作品、心性、人物像などを紹介し、比較・検討することを試みる。具体的に言うと、周作人、芥川龍之介、太宰治の三人を選んだ。いずれも著名な人物だからここで紹介するまでもないだろう。

しかし魯迅とゆかりのある多数の人びとのうち、なぜこの三人に絞ったのかと問われれば、紙数の制約を除けば、筆者の力量と主観とによる。だから当然のことだが、この三人以外にもより良い選択は多数あるだろう。ただ、主観と言ってもたんなる恣意ではない。三人の営為、作品、中国との関係性などを、魯迅を念頭におきながら概観し、それらの有意味な繋がりをたどれば、これまでとは若干違った魯迅像の一面が明らかにされるであろう。またこれらの作家たちの特質や生きざまや相互関係がより鮮明になるであろう。さきにここで採りあげた人物の選択は、たんなる主観ではないと述べたが、その具体的・客観的理由については、行論の中で明らかにするであろう。

## 1. 魯迅と周作人が翻訳した日本の小説

晩年、魯迅はこう書いている。「わたしはどのようにして、小説を書きはじめたか。…（かつて）中国においては、小説は文学のうちには入らず、小説を書く人間は文学家と呼ばれなかった。…小説を「文苑」のなかにかつぎこもうというつもりは、わたしにもなかった。その力を利用して、社会を改良しよう、とおもっただけのことである。/だが、創作しようとおもったわけではなく、勢力を注いだのは紹介、翻訳であった。とりわけ短編、特に被圧迫民族の作家の作品に精力を注いだ。…当時、もっとも愛読した作者は、ロシアのゴーゴリ、ポーランドのシェンケヴィッチだった。日本のものでは、夏目漱石と森鷗外であった。」〔『全集』、6；341～42〕

この引用から魯迅の文芸活動の、とくに初期において、翻訳が占める比重の大きなこと、そのもつ目的、重要性などを理解することができるだろう。

魯迅はかなり多数の日本の小説や評論を翻訳している。翻訳はいわば文化の一つの流れ、移転である。魯迅にとって翻訳により他国の文学を導入し、人々の間に普及し、知らしめることは、重要なことであり、これを重視したのであった。いわば啓蒙主義者としての魯迅。文学を志す若い者に対し彼は安直に創作を書きなぐるよりは、良書の翻訳をキチンとやることの方がためになるとし、翻訳をやることをたびたび勧めている。魯迅と周作人とが翻訳し、1923年に出版された『現代日本小説集』の著者と作品名を具体的に列挙すれば、以下のとおりである。<sup>1)</sup>

夏目漱石	「懸物」、「クレイグ先生」/	森 鷗外	「あそび」、「沈黙の塔」
		(訳本『ツアラトウストラ』の序に代ふ)	
有島武郎	「小さき者へ」、「お末の死」/	江口 渙	「峡谷の夜」
菊池 寛	「三浦右左衛門の最後」/	芥川龍之介	「鼻」、「羅生門」

以上、11点。それに加えて、厨川白村『苦悶の象徴』(1925)<sup>2)</sup>の翻訳がある。さらに周作人の担当により、つぎの作品が翻訳されている。

国木田独歩	「少年の悲哀」、「巡査」/	鈴木三重吉	「金魚」、「黄昏」、「写真」
武者小路実篤	「第二の母」、「久米仙人」/	長与善郎	「亡き姉に」、「山の上の観音」
志賀直哉	「網走まで」、「清兵衛と瓢箪」/	千家元麿	「深夜のラッパ」、「バラの花」
江馬 修	「小さい一人」		
佐藤春夫	「私の父と父の鶴の話」、「黄昏の人間」、「形影問答」、「雉のあぶり肉」		
加藤武雄	「郷愁」		



全国第二回木版画移動展覧会会場にて撮影(1936年)

写真1 魯迅

死去11日前。上海全国第2回木版画移動展覧会会場にて。

出典：『魯迅全集』8巻

みられるとおり、日本人作家に対するかなりの確な鑑識眼を有していることが、まず注目される。<sup>3)</sup> これらの翻訳は、彼の活動のおおむね初期におけるものであり、二弟周作人との協同になる。同時に、対象の選択にさいしては、中国的ならびに彼ら自身の価値観が当然のことながら反映されている。たとえば自然主義文学の無視、白樺派の重視、厨川白村への着目など。また作家のどの作品を選ぶかについても同じことがあてはまる。総じて、中国側の関心は、私小説的なものではなく、文芸作品とは、人生と真正面から向き合うものであり、そこに真摯な姿勢やある種の理想を求めようとする志向をより重視している。これは彼らだけでなく、他の作家にも共通する傾向である。ちなみに、魯迅がつぎの三人について短いコメントをしているので、参考までに抜粋・引用しておこう。

漱石：「いわゆる「低回趣味」の文学で、また「余裕のある文学」とも称した。彼の作品は「想像力が豊かで、文辞が美しいことで知られている。猫、坊ちゃんなどの諸編は、軽妙洒脱で、機知に富み、明治文壇における新江戸芸術の主流であり、当世にならぶものがない。」

鷗外：「彼の作品は、「批評家が挙って透明な理知の産物で、その態度には熱がない」と言う。魯迅は、それとは反対のものもあるとして、ここでは「あそび」を採りあげ、訳している。

芥川：「彼の作品…主題で最も多いものは希望が達せられた後の不安か、あるいはいままさに不安におののいているときの心情である。彼はまた古い材料を多用し、ときには物語の翻訳

に近くなっている。だが、昔のことをくり返すのは単なる好奇心だけからではなく、より深い根拠に基づいてのことである。」つぎの〈 〉内は、『現代日本小説集』には収録されなかったが、『全集』12巻(292～3)によって補筆。〈「長い鼻の話は、日本の古い伝説で、作者はそれに新しい装いをみせたにすぎない。作中の滑稽味は才気があふれすぎているところはあるが、中国の…滑稽小説とくらべてみて、実に上品である。〉

## 注

- 1) 「魯迅著訳書年表」、『全集』、12および29巻所収、今村与志雄〔1990：93～96〕による。これは、『現代日本小説集』というタイトルで、上海の商務印書館から1923年に出版された。
- 2) 訳業リストに厨川白村(1880～1923)が見られるのは、いささか奇異に思われるかも知れない。彼についてひと言触れておけば、厨川の著作の多くは、刊行時にベストセラーとなり、ひろく読まれた。大正の一時期、彼は「時代の寵児」となった感がある。だが彼の悲劇的な死を境に、日本ではほとんど論じられることがなく、忘却の人となった。だが中国では事情がことなる。魯迅らによって『苦悶の象徴』が翻訳され、『象牙の塔を出でて』など、その他主要な作品はすべて翻訳され、ブームがつついた。これは「厨川白村現象」とよばれた〔工藤貴正(2010)〕。魯迅はなんども厨川の作品を講義のテキストに使っている。
- 3) この『現代日本小説集』については、非本土系の中国人研究者は、あまり高い評価を与えていないようである。たとえば、夏志清「米国で版を重ねる魯迅論」、〔小山三郎・鮑耀明(2011)所収〕。中国文の評価については、筆者はコメントできないが、しかしこの時点における作家の選定については、的確なものであると思う。

## 2. 周作人についての素描

ここでは、魯迅の「周辺」について(というよりは、中心に最も近い位置にいる人物)の、一番手として、周作人(1886～1967)を採りあげ、彼の秀いでた才能と複雑怪奇な人となりの一端をごく簡単に素描することにしたい。

すでに官費留学生の試験に合格していた彼は、兄・周樹人(魯迅の本名)に連れられて、1906(明治39)年はじめて来日した。兄同様、南京にある官費で学べる海軍の学校を卒業したが、目の悪い彼は、軍関係は諦め、初めから文学への道を選んだ。彼は語学の才能に優れ、のちに江戸文学やギリシャ文学・古典にも通じるようになる。

初め法政大と立教大学で学んだ。この間、友人たちと共同で賄いのために雇い入れた日本人女性、羽太信子と親しくなり、やがて結婚した。長男の結婚で大変苦勞したからか、母・魯瑞は、次男や三男の結婚についてはもはや干渉せず、本人たちの意思にまかせた。ちなみに、三男・建人は、のちに姉信子の出産を手伝うため東京からよび寄せた妹の芳子と結婚した。

こうして魯迅は、やがて故郷の紹興から母と妻・朱安を呼び、北京で家族が故郷にいるときと同様同じ敷地内にある家屋で一緒に生活を営むことになった。

作人は、早くから白樺派の文人たち、とりわけ武者小路実篤とコンタクトがあり、「新しい村」を訪れ、そのルポルタージュを『新青年』に寄稿している。



写真2 周作人

周作人（中央）とその妻羽太信子、右は信子の弟羽太重久 1910年ごろ日本で撮影。

出典：『魯迅全集』第14巻

だが、すでに別稿で述べたように、この共同体は数年足らずで破綻し、魯迅が苦勞して獲得した家から出ていくことになる。兄弟の不和は最後まで回復せず、協同作業も終焉。〔徳永(2018)；41〕この点についてはここではくり返さない。<sup>1)</sup>その後たどった道について、簡単にみておこう。

その前に、蒋介石の反共クーデター（1927年）以降の背景の推移について簡単に触れておこう。まず社会、政治的背景は、蒋介石による反共クーデターを境に大きく変わった。第1次国共合作は終わり、右翼テロが頻発するようになった。さらに1937年になると日中戦争（盧溝橋事件：日本は最後まで「日支事変」と称した）が勃発した。戦争は以後8年間、中国全土の各地に及んだ。日本軍が南京をはじめ主要都市を占領すると、国民党政府は重慶へ移転。主要な施設の南遷（北京の文人たちは、長沙に結集、のち重慶へ移転）が行われ、抗日活動が続けられた。従来、たとえば義和団事件の場合だと、北京が外国の軍隊によって占領されると、すぐに屈服し、中国は屈辱的な条件で外国との和睦に応じてきた。だが、今回は全く異なる。長期戦を覚悟し、抗日戦を止めなかった。他方、共産党はかの「長征」を挙行し、延安に根拠地を築いた。〔石川禎浩(2010)；194～199〕

作人はこうしたなか北京（日本軍の占領下、北平と改称されたが、ここでの表記は北京のままとする）に留まり、南遷に加わらず、そればかりか同大学の文学院院长、図書館長に就任した。漢奸とは、占領下、敵国・日本に協力、加担したものをいう。国を売った、裏切り者であり、最大の蔑称である。周作人に対し漢奸ではないか、という疑惑がたかまってきたのは当然であろう。かくて、作人の友人、知人たちが、怒りを込めて、以下のような公開状をおおやけにし、敵対する日本への協力を止め、すみやかに南遷するよう呼び掛けた。〔木山英雄(1978)；90～91〕

## 茅盾らの周作人に与える公開質問状

作人先生

…先生は、中国文芸界にかねて相当の貢献があり、しかも国立大学の教授として国家社会の優遇と尊敬を存分に受ける身でありながら、甘んじてかかる天下の大誤謬を犯し、文化界に犯国媚敵の汚点をつけた。(中略)

私たちは最後の忠告として、先生に臨む。翻然悔悟の上ただちに北平を離れ、…抗敵建国の運動に参加せよ。さもなくば、一斉に糾弾を加えて、先生を民族の大罪人、文化界の反逆者と公認するほかないだろう。一念の差が忠邪を千載にわかち、幸いに賢明なる分別あれ！

茅盾 郁達夫 老舍 胡風 丁玲 …(以下省略。)署名者：計 18 名。

このような友人、仲間たちからの激しい公開質問状、糾弾の声にもかかわらず、作人は北京からついに一步も動こうとはしなかった。

1945 年 8 月、ついに戦争は、日本軍の敗北、連合軍・中国の勝利で終わった。同年 12 月、作人は自宅で国民党政権の憲兵により逮捕された。その後身柄を南京に移され、南京高等法院で裁判にかけられた。彼に対する判決は、懲役 14 年と公民権の剥奪等であった。国民党政権は、彼の漢奸の罪を認めたのである。他方、法廷の外では、社会はまさに激動しつつあった。国・共の内戦が始まったのである。作人は刑期よりはるかに早く、49 年 1 月に釈放され、秋には北京の自宅に帰宅することができた。

彼はそこでギリシャ語文献などの翻訳や、随想、回顧録などを執筆することが認められた。かつて兄が『兩地書』を出版したとき、その売文業ぶりを冷ややかにみた作人は、今度は彼自身が、「売文業」に身をやつすことになったのは皮肉というほかない。

1960 年代後半になると「文化大革命」の嵐が中国全土を吹き荒れた。紅衛兵の一団が作人宅を襲ったのは、1967 年 5 月であった。それからというもの、彼は台所の狭い部屋におし込められ、そこで寝起きすることを強いられたという。同年 5 月 6 日、彼がすでに事切れているのが家族によって発見された。これが作人の最後であった [劉 岸偉(2011)：421～423]。<sup>2)</sup> 権力欲に狂った、一人の老政治指導者・毛沢東の妄動は、かつて同じ大学で働いたこともあり、いまはようやく平穏な老後を送っている碩学の生活をさらに悲劇的なものにしたのである。

ところで、竹内 好は、かつて魯迅－作人の兄弟関係についてこう書いている――

「魯迅と周作人とは、表現が極端に違うが、ある意味ではお互いが相手を影にもつほど本質的に類似している。思想的にそうであるばかりでなく、気質的でもそうである。従って、きっかけがあれば、相手の中に自分の弱みばかりを見えるということは、ありえぬことではない」と。[竹内好(1961)：53]。

竹内がこれを書いた時期(1944 年ころと推定)は、日本における魯迅研究が未発達な状態で

あった。その状況を斟酌しても、筆者には、周兄弟が表現方式はともあれ、思想上、本質的にも類似しているとは考えられない。竹内の上記の指摘は理解に苦しむ。筆者は、政治的イデオロギーの違いを基準にことを論じようとしているのではない。もっと深いところの、思想、性格および人間性の異質性を吟味すべきだと言いたいのである。

周作人は、随所で中国と日本との関係はギリシャとローマの関係と似ている、と言っている。〔周作人「日本文化を語る手紙」(1935)、張競/村田雄二郎(2016)、2巻所収；77～84〕；木山英雄(1978)；35〕。この比喩は言い得て妙である。中国人の多数が、日本文化は中国文化の模倣にすぎないので、なんら学ぶ必要がない、と思いついでいること——そのような偏見ないし先入観は訂正しなければならない、という文脈で、作人は述べているのである。周作人が日本文学の中国への導入・移入にはたした役割は大きい。

終わりに、周作人が亡兄について書いている文章を引用しておきたい。

「これこそ〔古典編纂に自分の名前を出すことに拘泥しないこと〕彼〔魯迅〕が物事をなすのに全く名誉のためにせず、ただ自分の愛好によったことを証明している。これは学問を研究し芸術を弄ぶものの最高の態度である。……またその後、彼はなぜそう〔筆名で『阿Q正伝』を書いたり〕したのか？それは決して他の人々が云うが如く、言論の激烈なために匿名にしたのではなくて…聞達を求めず、ただ自由に考えたり書いたりすることを求めて、学者文人の名を欲しなかったからである。況して利のためでもなかった。』〔周作人(1940) 277、280～281〕

この一文には、兄弟不仲だったにもかかわらず文学者としての亡兄のことが、私情を交じえず淡々とかつ深い尊敬リスペクトの念を以って記されており、共感を覚える。

## 注

- 1) 迂闊にも、かなり遅れて、小山三郎・鮑 耀明〔2011〕を手にし、同書所収の鮑耀明「ある中国人の手紙と句作——北京通信 1983～1997年\*」を読んだ。これは編者の一人の鮑耀明〔香港の文人、ジャーナリスト〕と周之荻(周作人の長男、豊一)との間の書簡のうち俳句に関するもの100通を選んで編集したもの。鮑 耀明あての手紙(1989年2月23日付け)において、豊一は、例の兄弟不和の原因は兄〔魯迅〕と弟嫁〔羽太信子〕との男女関係にあったと、陶龔孫からの伝聞として記述している。しかし兄弟の共通の友人許寿裳が事件当時、はっきりと指摘しているように、「信子にはヒステリー症のところがある」ので、上記の魯迅と信子との「男女関係…」は、彼女の妄想に基づくものと考えられる。筆者の見るところ、作人は家庭生活について無頓着であり、完全に女房の尻に敷かれていたのではないかと推測される。(強調は引用者)
- 2) 顧 偉良(弘前学院大)の報告によれば、近年、周作人の遺族のもとに、彼宛てに送られた日本人作家・芸術家からの膨大な書簡(1400通余り)が、無事に保管されていることが判ったという。そのなかには志賀直哉、里見弴、武者小路実篤、梅原龍三郎からのものが含まれている、という。作人の広い交流・人脈のあとが伺われる。(同氏稿「周作人 隠れた人間像に光」朝日新聞2015年4月2日)、「周作人と武者小路実篤」、聖教新聞、2015.6.3.所収)など。

### 3. 魯迅と芥川龍之介

比較検討の第二番目には芥川龍之介に登場を願おう。魯迅と芥川、この二人には、一見なんの関わりもないかの様である。芥川は、周知のように、理知が感情をおさえ、きわめて整然とした、しかも閃きのある作品、あるいは古典に題材をとりながらも、そこに現代的な技巧や心理的解釈を加えた作品を世に出した。他方、魯迅は、「文学革命」の旗手の一人として出発し、旧社会のかかえる積年の問題を剔抉しつつ、それを新しい文学、表現様式をみずから創造しながら、描いた作家・文学者である。彼によって中国現代文学の礎石、少なくともその重要な一つが築かれた、と言っても過言ではない。しかし子細に見ると両者の間には、いくつかの重要な共通点と関連性が見られる。より立ち入って検討しよう。

まず、何よりも、二人とも短編小説の名手であった。魯迅には『阿Q正伝』という中編もある。晩年、三代にわたる長編の構想をいただいていたようだが、この構想は結局実現しなかった。さらに『兩地書』、『古事新編』、『三閑集』などなどの一連の、かなり大部の著作がある。しかし、それらは、往復書簡、独立した短編の編纂書、あるいは「雑感文」を集成したものであり、一般的な意味での長編小説とは言えない。

では、芥川の場合はどうか。後期の「河童」、「齒車」、「西方の人、同（続）」は、中編といえるだろう。「偷盗」は元来、長編を意図したものだだったようだが、彼自身失敗を自認しているように、意図したようには上手くまとまらなかったと思われる。谷崎潤一郎との有名な論争文「文芸的な、余りにも文芸的な」、「同（続）」がある。これも分量としては十分長い。けれどもこれは、評論であって、創作、小説の範疇には入らない。両者がもっとも活躍した分野は、やはり短編であり、長編ではなかったのである。

魯迅には、周知のように「雑感文」という分野<sup>ジャンル</sup>があった。これは単なる時評というよりは長く、自分の考えなり、思想を自在に述べ展開する形式であった。彼は雑感文を好んで書いた。そしてこれを単なる雑文、時評などよりワンランク上のジャンルとして位置づけ、それに相当なエネルギーをつぎ込んだ。官憲の禁止命令をくらすために、彼は140余りのペンネームを用いたという。「雑感文の作家」と呼ばれる所以である。

これに対応するものとして芥川の『侏儒の言葉』を指摘できるかもしれない。これは周知のように雑誌『文芸春秋』の冒頭を飾ったごく短く、鋭いアフォリズムを束ねたものである。魯迅は、文章は事物のすべてに触れようとするのではなく、鋭利な匕首で急所を一突きにするように、その本質を抉り出すのがよい、という主旨のことを述べている。[『兩地書』, 全集13; 56] 芥川の記事も切れ味がよく、剃刀を連想する。切れ味は抜群で、見るだけで鳥肌が立つ。が、ときに脆いとも感じる。他方、連想といえば、筆者には、魯迅の作品はときに青龍刀のような切れ味というか、凄みを感じさせる。怨念の持続、執念とでもいべきものを。その好例は「鑄劍」〔全集, 3; 295~315『古事新編』所収〕であろう。この復讐の物語の執拗さと比べると、日本の仇討は、——等しく残忍であるには違いないのだが、口上の物々しいわりには——概して淡泊であるように感じられる。

さらに二人の間には共通の感受性、気質がみられるが、これについては後でより立ち入って論じ

ることにする。筆者はこの点の類似性こそがもっとも肝要ではないかと考えている。

最後に、二人の間で「創造的模倣」が働いたであろう可能性のある事例を、藤井省三が指摘している。鋭い着眼点であると思う。芥川の「毛利先生」と魯迅の「孔乙己」とがそれである。〔藤井省三（2015）〕。藤井の研究を手がかりに、以下でより具体的にこの点を検討する。

まず「毛利先生」。この作品は、芥川全集版の末尾には、大正7年12月とあるが、これは恐らく脱稿の時点であろう。実際には翌8（1919）年1月刊の『新潮』に掲載され公刊された。話の概略は、以下の通り。―

ある府立中学校での話である。急死した前任者の後任に、臨時に雇われた、私立中学の英語教師が毛利先生である。風采の冴えない、私立から来た初老の彼は、奇妙な服装や口調のゆえに生徒たちの揶揄や軽蔑の絶好的となる。授業も決して上手いとは言えない。つい生活の苦しさをこぼしたりして、生徒の反感を買ってしまう。だが、つぎの学期になると、もはや毛利先生の姿を見ることはなかった。

後年、自分は大学を卒業したのち、神田の喫茶店で思いがけない光景をみた。片隅でストーブを囲みながら店の給仕たちに熱心に英語を教えているのは、紛れもなく、かの毛利先生であった。先生はたんに生活のために英語を教えているのではない。自分がかつてその点を誤解し、先生を蔑んでいたことを内心恥じた。英語を教えることは、先生の生きが이었다のである。

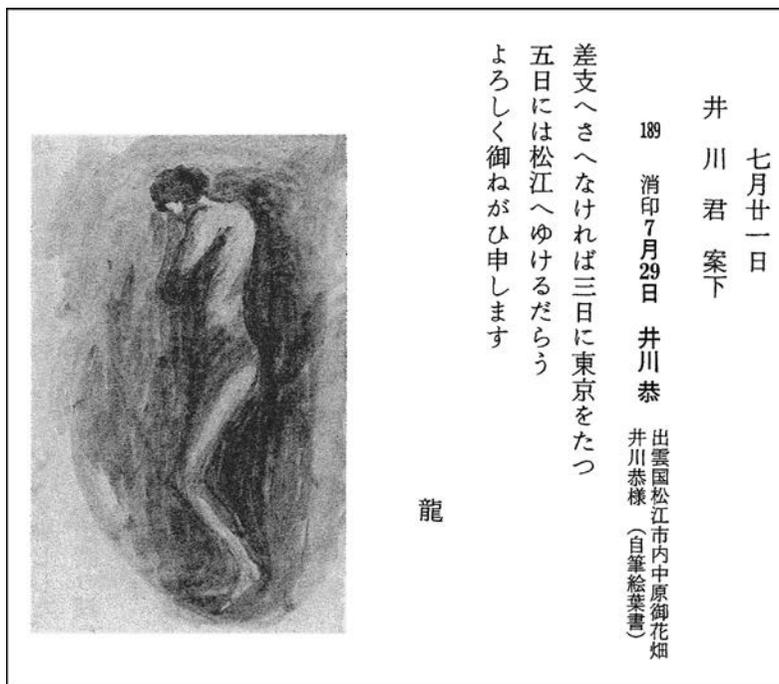


写真3 芥川の友人恒藤（旧姓井川）宛の直筆絵葉書  
出典：『芥川龍之介全集』17巻より。

つぎに「孔乙己」に移ろう。ひと言でいえば、科挙の試験に何度も失敗し、ついに社会的脱落者となった孔乙己とよばれる中年書生の話。彼がときおり立ち飲みにかかる酒場のお爛番の少年の眼を

とおして、この科挙の犠牲者の悲哀と社会をコミカルなタッチで諷刺する好短編である。

孔乙己は「狂人日記」について、『新青年』に発表された魯迅の作品の第2弾にあたる。後述するように、これには異説というか、若干、解説を要する点がある。<sup>2)</sup>

ここに採りあげた二つの作品は、いかにもパツとしない主人公——老英語教師と脱落したインテリくずれの書生——を論じ、彼らが周囲から揶揄され、軽蔑されるさまを、ややコミカルな感触でヴィヴィッドに描いている。語り手の目線は、クールだが、さえないインテリやら社会的脱落者を軽蔑しているわけではない。胸中では、むしろ好意的でさえある。芥川のもは、冒頭で、都心に新中間層が形成されている様子をうかがわせ、また末尾の意外性が効果的である。だが、叙述はやや冗漫である。魯迅の作品も、ほぼ類似のテーマを扱っているのだが、枝葉をそぎ落とした、すっきりした構成になっている。科挙という教育・社会制度の弊害を直接的にはなく、側面からするどく描きだしている。

双方とも佳作だが、とくに後者は、前作「狂人日記」に比べてとくに構成上格段に向上の跡がみられると思う。筆者としては、「創造的模倣」の点に関しては、とくにスペースの関係もあり、残念ながらこれ以上論じることは控える。

ここでさきに保留した二人の特性について、さらに立ち入って検討してみよう。魯迅が自分のある種の心境を表すときに、よく「寂寞」という言葉を用いた。寂寞とは、たんに寂しいというだけでなく、これまで抱いていた期待や望み、信念、目論みなどが蹉跎し、挫折感を伴うような寂しさであり、深い寂しさ、孤独感を含む感情を意味する、と考えたらいいだろう。『呐喊』の「自序」(全部で7ページ足らずの短い序)に彼はこの言葉を7回も使っている〔『全集』、2巻〕。

芥川もまた、まだ旧制一高生だったときに、親友・恒藤恭あての手紙で奇しくもこう述べている。—

「イゴイズムをはなれた愛があるだろうか。イゴイズムのある愛には人と人との間の隙間の壁をわたる事はできない。人の上に落ちてくる生存苦の寂寞を癒す事はできない。イゴイズムのない愛がないとすれば人の一生程苦しいものはない。周囲は醜い。自分も醜い。そしてそれを目の当たりに見て生きるのは苦しい。しかも人はそのまま生きることを強ひられる。一切を神の仕業とすれば、神の仕業は悪むべき嘲弄だ。…」〔恒藤(旧姓井川)恭あての手紙(1915[大正4]年3月9日:芥川龍之介全集 17;252~3 強調は引用者)〕。

この芥川を感じとった「生存苦の寂寞」とは、魯迅の「寂寞」とほぼ重なり合うものと言ってよい。芥川は概念は、人間の生存においては「善と悪が相反的ではなく、相関的だ」という認識に根ざしている。それはすぐ後に「羅生門」へと展開してゆき、さらに彼の一生の人間観、厭世的ものの見方に連なってゆく。〔白井吉見、1968〕。ちなみに、芥川も恒藤も一高時代、集団で遊ぶことを好まなかったが、孤独な二人は妙に気があったらしい。一高を2番の成績(1番は恒藤)で卒業し

た芥川は、東大の英文科へ。恒藤は専攻をかえ、京大の法学部へそれぞれ進学した。道は東西に別れたが交友は続き、二人は終生の友であった。

恒藤は芥川自殺の知らせを受けたとき、かねてからその可能性を予感していたらしい。「…初めて悲報を耳にしたとき、後で考へると自分でも不思議な位に、少しも駭<sup>おどろ</sup>かなかった。そして、彼の自殺を決意するに至った心持に十分同感することが出来るように思った。唯、俄かに人生が数倍の寂莫を加へた感に襲われた。…」〔恒藤恭、(1940)：67～68〕<sup>3)</sup>

芥川は中国についてかなり関心を抱いており、また該博な知識をもっていた。彼は大阪日日新聞の海外視察員として、1921（大正10）年の春から夏にかけ初めて訪中。上海、江南、北京などを数か月間旅行し、朝鮮をへて帰国している。その結果は、「上海遊記」として同紙に掲載〔芥川全集、8巻〕された。北京滞在中、魯迅の訳した「羅生門」が『晨报副刊』に掲載され始め、芥川は、「これには自分の心地がはっきりと現れている」と喜んだ、という。〔魯迅全集、17：419〕ただし、芥川が魯迅と会う機会はなかった。

その翌年、「將軍」、「桃太郎」を発表したが、これらの作品には芥川のアンチ・ミリタリズムの思想ないし感覚がつよく投影されている。「將軍」（N 將軍 → 乃木希典がモデル）は、軍人をカリカチュアライズしている。「桃太郎」は、平和に暮らしている鬼ヶ島（中国を暗示）を侵略し、略奪しようとする日本軍の横暴を容易に連想させる寓話だ。童話を使って巧みに日本の中国進出、さらに侵略の意図を諷刺し、批判していることは明らかである。〔芥川『全集』、11巻〕。芥川は、その後の日本が、中国侵略を止めどもなく拡大し、戦争という奈落への途を、まさに踏み出そうとしていることを予感し、警告したのはなからうか。

魯迅は芥川の意図を正しく理解していたが、より若い世代の作家になると芥川を全く評価せず、批判的ないし誹謗に近いコメントも出されてきた。これには、芥川の挑発的な言辞がまずあったし、さらに日中関係が悪化したという事態の推移も起因していた。たとえば、張競・村田雄二郎（2016）の2巻所収の巴金論文（巴金「いくつかのおしつけな話」を参照されたい。彼は芥川のことを全く理解しているとは思えない。芥川のさして重要でない指摘に対したただ反能的に反撓しているに過ぎない。

これに対して魯迅は芥川を擁護し、増田渉によれば、とくに「（魯迅は）その（芥川の）晩年のものに感心しているようだった。…僕（魯迅）は芥川のは、もう少し中国の青年にも読ませたいとおもうから…翻訳しようと思っている。」と。増田によれば「魯迅と芥川とでは、どこか素質的にある部分、共通する部分があるように思われぬこともない、」〔増田渉(1967)：355 強調は引用者〕と指摘している。増田の表現は、ずいぶん慎重というか回りくどいが、これは鋭くかつ重要な示唆だと思う。すでにみたように、この二人は互いに寂寞という言葉、人間観で共鳴するものがあつた。芥川が魯迅の訳した「羅生門」を読み、自分の気持ちがよく表れていると喜んだことはすでに指摘した。このことから魯迅と芥川の文学、性格上の共通性、類似性をよりはっきりと捉えることができると思う。またそれは、罵倒の仕合という日中間の、不毛な議論に陥らないための脱出口を示すものでもあるだろう。

芥川龍之介は中国でも人気のある作家であった。日本のみでなく中国古典からもヒントをえた作品も書いた。幼いころからの不幸——母の狂死、他家への養子、失恋、生の不安など——に根ざす芥川の深層心理には、華やかで、若くして脚光を浴びた作家としての名声が投影される一方で、他面、繊細で傷つきやすく、「生存苦の寂寞」という容易に解けがたい問題がたえず彼を悩ましていたのである。多くの人たちは、彼のすぐれた才能、社交性、ユーモアのセンスなどのために、もう一つの陰の問題の重さに気がつかなかった。恒藤や魯迅はその重要性をよく理解していた、この数少ない人であったと言えるだろう。

最後に、二つの作品の間にインスピレーションの共鳴、「創造的模倣」（郁達夫）があったか否かの問題について。決定的なことは言えまいが、それほど魯迅の作品は、原作と見なされているものを換骨奪胎している。スペースの関係もありこの点をこれ以上詮索することはしない。むしろこのことは、魯迅が「毛利先生」を読んで、自作を執筆してみようかという一つのきっかけになったことを否定するものではない。

\*

ところで、芥川龍之介につよく憧れている、東北農村出身の文学青年がいた。芥川に心酔し、憧れていただけに彼の死は、青年に大きなショックを与えたに違いない。その青年の名は津島修治（のちの太宰治）とう。次節では太宰について論じることとする。

## 注

- 1) 「ある府立中学校」とは、芥川龍之介が通学していた東京府立三中のことである。彼の二年上には、河合栄治郎や久保田万太郎が在学しており、川端龍子も卒業生だった。初代校長の八田三喜、その後を継いだ広瀬雄は、創立以来リベラルな教育方針を掲げていた。芥川はとくに広瀬から英語を教わり、彼から大きな影響を受けた。芥川龍之介〔1997〕。戦後、校名は都立三高をへて、現在は都立両国高校となっている。三中は、「下町の名門校」であり、文中にもみられる毛利先生の生徒に対する、ほとんど卑屈に近い低姿勢、他方、生徒の先生に対するいささか生意気な態度は、このような名門校のエリート気質と、私立中学に対する世間一般の低い評価とによるものと思われる。
- 2) 「孔乙己」は『新青年』6巻4号に発表された。藤井省三の考証によれば、同誌の奥付では、1919年9月1日出版となっているが、同誌の広告が『申報』の同年8月19日に掲載されているので、実際には同年8月中旬に発行された、と推定している。そして同作原稿の完成を1919年の4月25日と推定している〔藤井省三(2015)：102～3〕。そうだとすれば、魯迅は、「毛利先生」(1919年1月刊。さらに、芥川の3冊目の単行本『傀儡師』(同年1月15日刊にも収録)を執筆する際には読むことができた、と指摘している。
- 3) ちなみに恒藤は、「滝川事件」の際の鳩山文部大臣・当局のとったやり方に反対して、数人の同僚とともに辞職し、京大を去った。戦後、恒藤は大阪市立大学の学長を務めた。

## 4. 魯迅「藤野先生」と太宰治『惜別』

太宰の小説『惜別』は、第2次大戦末期の1943(昭和18)年前後の頃に構想が具体化し、翌年

後半に執筆が開始。45（昭和20）年2月には脱稿をみたが、空襲などのため、出版されたのは、同年9月、つまり敗戦直後であった。刊行は朝日新聞社。表紙および中扉にそれぞれ「伝記小説 惜別」、「医学徒の頃の魯迅」という副題が付いていた。（その後の改訂版では副題は削除。）これは太宰治が書いた「唯一の国策小説」と言われている。また大方の意見では「失敗作」と見なされ、とりわけ竹内好ら中国文学者の間で評価はきわめて低い。なぜ「失敗作」と評価されたのか。どうして『惜別』は太宰の作品のなかでいま一つ人気がないのか。以下で、この作品の成立の経緯、異なる評価の原因、筆者の意見などについて詳しく検討する。



写真4

別れにさいし藤野巖九郎が周樹人（魯迅の本名）に贈った写真とその裏に書いたサイン。  
出典：北京魯迅博物館（2003）

『惜別』執筆の経緯 内閣情報局と日本文学報国会とは、1943（昭和18）年11月に採択された「大東亜共同宣言」の5原則を文学作品化することを決めた。その「小説部会」には太宰をふくむ約50名の執筆希望者があり、<sup>1)</sup> 選考の結果、彼は「独立親和」という主題の執筆者として正式な委嘱をうけた。（ちなみに「共存共栄」テーマの執筆委嘱者は、高見 順。〔太宰治全集7巻、「解題」〕この文学作品化の計画で、実際に執筆し、実現したのは、太宰のほか森本薫の戯曲「女の一生」の二作にすぎなかった〔尾崎秀樹（1971）；70〕。

太宰が審査委員会に提出した「『惜別』の意図」にはこう書かれている。「魯迅の晩年の文学論には、作者は興味を持ってませんので、晩年の魯迅の事にはいっさい触れず、ただ純情多感の若い一清国留学生としての「周さん」を描くつもりであります。中国の人をいやしめず、また、決して軽薄

におだてる事もなく、所謂潔白の独立親和の態度で、若い周樹人を正しくいつくしんで書くつもりであります。…」(『太宰治全集』、7:410~11)<sup>1)</sup>

こうしてできた『惜別』の初版は、量的には98820字、約1万字である。他方、魯迅原作の「藤野先生」は、約6千字の短編である。(魯迅全集③の日本語訳により計算。)分量的には、大まかに4割り方増加した。つまり、ラフに言うと、6千字の短編を基に、その後の取材、調査および、とりわけ太宰自身のイマジネーションを加えて、長編小説に仕立て上げたことになる。むろん、こう述べたからといって、太宰が原作をそのまま利用しているわけではない。当然、彼なりに原作を換骨奪胎し、脚色して利用しているのである。

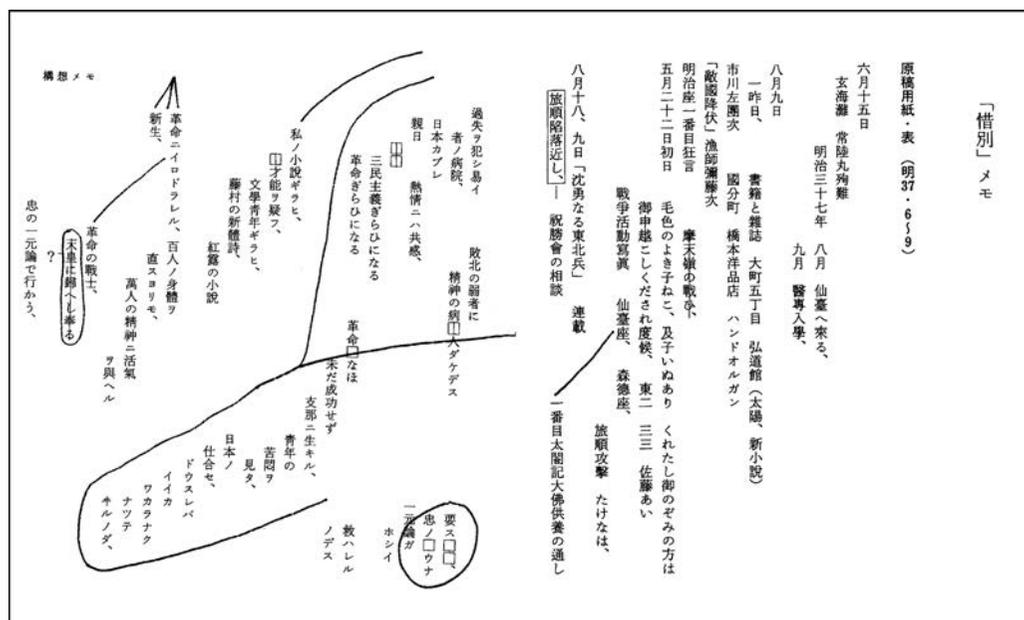


写真5  
『惜別』構想メモ(部分)  
『太宰治全集』(1979)13卷(草稿)より

この点に関連して、彼は本書の「あとがき」でこう述べている。「この「惜別」は内閣情報局と文學報国会との委嘱で書きすすめた小説には違ひないけれども、しかし、両者からの話が無くとも、私は、いつかは書いてみたいと思って、その材料を集め、その構想を案じてゐた小説である。…/ しかも、私がこれを書き上げて、お役所に提出して、それがまま、一字半句の訂正も無く通過した。…」つまりこのテーマは、彼が前から温めていた年来の構想であったこと。鋭い評論を書く一方で、詩的で、どこか含羞をおびる魯迅の作品と人柄に彼は興味を抱いていたのだろう。そして驚くべきことに原稿は無傷でパスしたという。しかも、戦争末期のことであり、もし彼の言葉に嘘がないとすれば、奇跡に近いことであったと言える。むろん、内容については、これから吟味しなければならぬが。――

そのさい、太宰は、先輩作家の小田嶽夫と相談し、教示を受けた。小田嶽夫著『魯迅伝』(のち

『魯迅の生涯』と改題、鎌倉文庫刊、1949年）が筑摩書房から刊行されたのは、1941年3月のことであった。雑誌掲載の論文を除くと、当時これと——太宰が本書執筆中の1944年に出版された——竹内 好『魯迅』とが、日本における唯一まとまった魯迅の伝記であったと思う。ちなみに、日本で最初に魯迅の名が知られたのは、「文学革命」のリーダーたちのワン・オブ・ゼムとして、1920年のことであったという。〔丸山昇(1976)；95〕。それからさらに15年後、1935（昭和10）年には、岩波文庫の『魯迅選集』（佐藤・増田訳）——中に「藤野先生」を含む——が出版され、ようやく魯迅の知名度がたかまった。改造社から『魯迅大全集』（1936）が刊行されはじめたが、7巻で中断。要するに魯迅伝に関する「材料」は、当時、戦後に比べると格段に少なかったのである。

委嘱が決まると、太宰は数日間仙台に取材旅行を行った。周樹人ゆかりの場所を訪れ、ヒヤリングを行うとともに、河北新報社で同社所蔵の明治期の新聞を読むなど、精力的に取材にあたった。こうした取材などをもとに執筆プランの草稿（115ページの写真5参照）を作成。内容を一瞥すれば、太宰の意図と旺盛な執筆意欲、意気込みが感じられる。

**叙述の形式と特徴。** 冒頭で、この話は「東北地方の某村に開業してある一老医師の手記である」と書かれており、この医師（＝[私]：田中卓）がかつて仙台医専の学生であり、周樹人の同級生だったときの懐旧談を語るという形式——つまり第三者が主人公の——形式で叙述されている。魯迅伝の資料が乏しかった当時、この形式は、事実の誤認や不明な点の記述から自由になり、太宰はそれだけ自分のイメージーションを存分に働かせることができた。その意味でこの形式は適切な選択であった。

だが他方、デメリットもある。とりわけ登場人物たち（これは彼らの口を借りた太宰自身の主張というか、おしゃべりなのだが）の饒舌さ、ご大層で、冗漫な説明——がきわだっている。元来、太宰は巧妙な語り手であり、それが彼の魅力の一つなのだが、本書のようなリアリティーのもつ意味が大きい場合には、この魅力があまり生かされず、やや精彩を欠く。事前調査で得た豊富な知識や見聞がかならずしも十分に咀嚼されておらず、それらを、多く盛り込もうとしたのが一因であろう。

**太宰治の育った家族と環境** これらについて、ここで一括してのべておこう。

太宰治（本名：津島修治）は、周知のように青森県北軽<sup>かなどむら</sup>金木村の地主の六男として1909（明治42）年に生れた。当初、津島家はたんなる一小地主にすぎなかったが、修治が生まれた頃には、田畑250町歩、使用人約30数人にかかる大地主になっていた。この急膨張は、不況などのため農民が手ばなさざるをえなかった農地を相当有利な条件で手中に収めた結果であった。

父源右衛門は、前から金貸業をも営んでいたが、のちそれを基礎に金木銀行を創設、その頭取となった。また彼は県内4位の多額納税者（明治37年）にランクされ、大正11年には貴族院議員になる。それ以前、すでに県議、衆議院議員（政友会）を歴任しており、東京住まいが多くなった。村民は彼を「金木の殿様」といい、修治にとって父は「僕の一番家でこわいもの」だったという。父母は修治にとって、「馴染みのうすい」存在であり、叔母のキエが彼を自分の子供のように可愛がった。もう一人、浄土真宗の熱心な信徒でかつ熱烈な天皇崇拜者であった祖母イシの存在も

忘れてはなるまい。天皇崇拜者に真宗の信者が多かったといわれている。

中学に進んだころから、芥川、志賀直哉らの文学書を好んで読み、同人雑誌を作り、自分も積極的に投稿し、編集や資金も分担した。「朱儒の言葉」をもじった「侏儒楽」を発表したのもこのころだ。芥川への傾倒ぶりが分かる。高校は一高を志望したが、受験に失敗。第二志望の弘前高校に入学した（1927年）。津島家の沾券にかけても、目標はとうぜん一高→東大でなければならなかった。修治は蹉跌をあげた。そして同年夏、芥川の自殺に激しい衝撃を受けたのだった。

弘前高時代には、公金横領の校長排撃運動に加わり追放に成功する一方、芸妓（小山初代）と知り合い、親しい仲となった（後年、二人は東京で同棲）。修治は次第に思想的に左傾化し、日本共産党の副次組織の学生グループをとおして、毎月10円のカンパをするなど、同党のシンパになった、とされている〔全集、別巻、486～87〕。ちなみに、当時の10円はかなりの大金である。

1930年春、「フランス語ができない」にもかかわらず、修治は、東大仏文科を受験、合格した。念願の東大生となった。（ただし津島家の期待にもかかわらず、卒業できず中退。）だが、「無産者新聞」を送付するなど、依然左翼活動を続けるとともに、井伏鱒二の自宅を訪問し、以後、井伏の師事を受けることになる。〔太宰治（1992）；（1999）所収の詳細な年譜；齊藤利彦（2014）などを参照〕

さて、ここで本題にもどる。太宰は、周樹人の日本人観を次のように捉え、日本で近代医学を習得したいという留学の当初の目的を語っている。

「日本人の思想は全部、忠という観念に *einen* [統一] されているのですね。」と。だが、忠孝思想は元来中国が原産地で日本が学んだのではないか、と私が反論すると、周はすぐにこう反論した。「支那では、…爾来しばしば帝位の豪奪がくりかえされ、…忠という観念は妙にあいまいなものにして置いて、そのかわり、孝のほうを強く主張し、これをもって治国の大本とし(た)。…日本では支那を儒教の国と思っているようですが、支那は道教の国です。民衆の信仰の対象は、孔孟ではなく、神仙です。不老長寿の迷信です」〔244～250〕

周樹人は、はじめ明治維新は、蘭学者によって開始され、彼らによって導入された西洋医学、科学がそれを成功に導いた、したがって自分は西洋医学を学んで「支那の杉田玄白になりたい」と言っていた。だが彼は、日露戦争後の頃になると、そうした認識を大きく変えるようになった。

「明治維新の源流は、[蘭学ではなく]、やはり国学である。…幕末の危機 [に際して] …遠い祖先の思想の研究家たちは一斉に立って、救国の大道を示した。曰く、国体の自覚、天皇親政である。…万世一系の皇室が徹乎として日本を治め給う神国の真の姿の自覚こそ、明治維新の原動力になったのである。」〔245〕このように彼は、蘭学から国学へ関心をシフトし、国学の意義を高く評価するとともに、皇国史観=天皇制国家の重要性を強調するようになった。

清朝末期の変革運動と日本社会 ここで気になることが感じられる。夏休みが終わり、周が東京

から帰ってきて再会すると、なぜか周の顔つきが異常に変わったと思った。私に対する態度も変によそそしい〔252〕。なぜなのだろう？ その原因はここには書かれていない。別の処で、しかも一般論として同君は清朝末期の変革運動を、次のように解説している。

「……革命党の秘密結社は、孫文を盟主として、もうとっくに大同団結を遂げている様子で、…日本に亡命して来た康有為一派の改善主義は孫文一派の民族革命の思想とは相容れず、康有為はひそかに日本を去って欧州に旅立ったらしい。…孫文自身も、「東京にあらわれており…このごろでは東京が支那革命運動の本拠になっているよう」〔206〕である、と。つまり周は、東京で中国革命運動の熱い動向に触れ、それに参加したいという気持ちを抱いて帰仙したのではなかろうか。別な資料によれば、1905年に1月、革命組織光復会の東京支部が結成され、周樹人もこれに入会したとされている。ただし彼がどの程度活動したかは明らかではない〔飯倉照平（1980）：86～87〕東京におけるこのような政治活動に参加したことが、彼の態度が一変したことの理由であり、さらには医学をやめ、文芸活動へと専攻を転換することにも繋がっていると考えられる。次年次になると周の医学を学ぶ熱意が冷めてしまった様子が指摘されている。

「革命」や「秘密結社」という言葉は、戦前、もちろん禁句であり、その内容をポジティブに叙述することもむろん治安維持法に抵触した。当局はこれらを〈x x〉とする伏せ字にするよう命じた。さきに見た芥川の「将軍」—後に比べればマイルドな批判—でさえ、数か所が伏せ字になっている。それでも大正時代はまだ多少よかった。治安維持法（1925年公布、その後数回にわたって改悪された）は、個人、団体の言論・思想の自由を徹底的に弾圧した。

太宰がその間の事情をこう述懐している。——これまで、原稿の大半の削除を命じられたり、全部の公刊が禁止処分を受けたりしたこともしばしばあった。新聞や雑誌のほうで、検閲の目が厳しいので、あまり知られていない小出版社に書き下ろし原稿をもち込んで出版する手が見つかわれた、…だが、戦争が進むにつれ印刷用紙の供給、統制がきびしくなり、用紙の配給、割り当て制、さらに出版社の整理統合を通じて出版事情がさらに難しくなった、と。〔「十五年間」太宰全集8：210：櫻井毅（2006）：43～49〕

純文学の作品を出版するのは、ごく困難になってきた。にもかかわらず、彼の原稿はほぼそのままの形で活字になり、日の目を見た。幸運としか言いようがない。どんな問題がそこにあったのだろうか？ 情報局と日本文学報国会のお墨付きをえたから、ことがスムーズにはこんだのだろうか？ むろん審査会議の内部でどのような議論があったのか、われわれには知るよしもない。以下はたんなる憶測の域を出るものではない。大東亜会議という仮にも国際会議で訴えるのであれば、参加各国の理解と協調を促進する内容のものでなければならない。だとするならば、直接敵国への敵愾心を高めるようなものではなく、より長期的視野に立った作品のほうが、より適切であろう。参加国のとくに知識層に訴えるだけの内容がなければならない。太宰の作品は十分そのようなレベルに達していたし、内容は文学報国会とその背後にいる情報局とのせめぎ合いの経験からして、下手に撥ねられることは極力抑えたであろう。すでに引用したように、蘭学から国学へ転換して、皇国史観を述べている箇所などは、後述のように原稿にすでに書かれていた。だから大筋において、太宰が当局に迎合したり、忖度して節をまげたりしているとは思えない。戦後の改訂でもこの部分は

削除されず、残している。(ただし戦後には占領軍・GHQの占領政策との関係が問題となる。)

そればかりではない。つぎのような文学の効用に関する重要な理論的メッセージを折り込ませている。周君はこういう。「文芸はその国の反射鏡のようなものですからね、国が真剣に苦しんで努力している時には、その国から、やはりいい文芸が出ているようです。…無用の用、とでもいふのでしょうか、馬鹿にならんものですよ。」〔280～81、強調は引用者〕。さりげなく、「文学無用の効用論」を説いている。

**日本社会と天皇制** 日本では『忠』が最も重要な徳目であり、その最高の位置にあるのは天皇である。だれもが天皇を敬い、彼のもとで一致団結して事にあたり、力を発揮する。周君の考え方は、さきにもみたように日露戦争勝利の後で変わり、蘭学経由の西欧科学の移入説ではなく、日本古来の思想、とくに天皇制を評価する国学の再評価へ急速に傾斜していく。〔244～〕

「維新の思想の源流は〔蘭学ではなく〕、やはり国学である。…徳川幕府も、やうやくその政治力の困憊期にはいり、内にあつては百姓の窮乏を救うこと能わず、そとにあつては諸外国の威嚇に抗しえず、日本国の崩壊の危機〔…に至らしめた。〕…（まさにそのとき国学者は）救国の大道を示した。曰く、国体の自覚、天皇親政である。天祖初めて基をひらき、…万世一系の皇室が儼乎として日本を治めたまう神国の真の姿の自覚こそ、明治維新の原動力になったのである。」〔243〕<sup>2)</sup>

これは皇国史観そのものに依拠した維新の解釈であつて、今では歴史学、政治学等の成果にてらして、到底支持することはできない内容である。だが、大国ロシアを破ったことによる国民の高揚した気持ちが、自国民の誇り、歴史の再評価を促したことは大いにありうる。またアジアの小国がヨーロッパの大国ロシアに勝ったことは、世界史的に見て大事件であり、とくにロシアに圧迫されていた隣国諸国、アジアの国々に希望を与えたであろう。

たが、そのことが即、皇国史観の正当性、その受容をみとめることにはならない。しかも天皇制の淵源を周樹人の口から説明させていることに、つよい違和感をおぼえる。このことだけで従来、戦時体制に与していなかった太宰にシンパシーを感じていた竹内 好、武田泰淳ら中国文学者らが失望し、交友関係を断った気持ちは十分理解できる。

**評価をめぐる二つの観点** 作品の評価はむずかしい。とくに『惜別』のように戦争の真ただ中で執筆され、出版された場合には、そうである。そのさい大別すれば、二つの立場ないし視角があり得るだろう。一つは思想・信条的分析視角である。太宰がここで述べたように、皇国史観、したがって絶対的天皇制体制を肯定し、賛美することは、誤りである。もしそれがかつて体制批判的であった者であれば、「転向」を意味する。思想・信条を安易に変えるような内容の作品は、文学作品に値しない。採りあげて内容を吟味し、論じる価値もないという観点である。

第二の立場は、思想・信条の観点とは、一応、別に、著者がその作品において自己の考え、思想、信条をどのように記述し、表現しているか。あるいはまた、たんに自己の信仰告白にすぎないものなのか——要するに、文学そのものの価値を問い、検討する視角である。文学的分析視角と言っ

てもいい。筆者は第二の観点にたつ。〔東条克美（2005）参照〕

以上のように、“一応、別に”整理できるとしても、問題は残る。二つの視角ないし観点が糾われた縄のように絡み合っている場合が少なくないからである。しかし問題を進めるために、ここでは敢えてプラグマティックな方法を提示してみよう。前者の分析視角に立てば、本書はゼロあるいは限りなくゼロに近いと評価されるだろう（竹内 好らが太宰と絶交したのはその例）。後者の視角に立てば、評点はゼロから10の間のいずれかになろう。だが、文学作品としての『惜別』を、フィギュア・スケートの審査のように、点数化することはできない。個々の問題点を指摘しながら、全体を総合して判断するしかないであろう。

太宰はここであえて文學報国会からの委嘱という機会を利用（あるいは逆用）して、困難を承知でこのテーマに挑戦した。すでに指摘したように、『惜別』が種々な問題、欠点を孕んでいることは否めない。そのうちの天皇制国家体制の賛美や日本文化の一面的、表面的評価・理解などはある意味で致命的なものであるといえる。だが、太宰は、さきにも述べたように、一部の修正を加えたうえで本書の再販を戦後も認めている。本書を、ある社会学者のように「奴隷の言葉」で書いたので、全面的に否定し、絶版にすることはしなかった。そこに太宰の『惜別』に対する自信と愛着を感じるのである。

多面、戦時の厳しい言論統制のもとで、あえて敵国の、革命的作家の青年期を主題に採りあげた着眼点の良さ、そして多くの作家が無念にも沈黙を強いられて、あるいは無気力になっているとき、表現者としての存在を明らかにし、文学の可能性を追求し続けた太宰の勇気と根性は、称えられてしかるべきではないか。「十五年間」の中で太宰は、当時を次のように回顧している。

「昭和十七年、昭和十八年、昭和十九年、昭和二十年、いやもう私たちにとってはひどい時代であった。私は三度も点呼を受けさせられ、そのたんびに竹槍突撃の猛訓練などがあり、……そのひまに小説を書いて発表すると、…昭和十八年に「右大臣実朝」という三百枚小説を発表したら、「右大臣実朝」というふざけ切った読み方をして、太宰は実朝をユダヤ人として取り扱っている（と揶揄された）。……しかし私は小説を書く事は、やめなかった。もうこうなったら、最後までねばって小説を書いて行かなければ、ウソだと思った。それはもう理屈ではなかった。百姓の糞意地である。…」〔前掲、「十五年間」；全集8巻；210〕

しかも彼は戦時の日本社会の時流に諾諾と追従することを良しとしなかった。たとえば、次に発表した『お伽草紙』（1945年）では、意図的に桃太郎をはずし、間接的ながら侵略主義否定の意思表示をしている。芥川の「桃太郎」を思い起こして欲しい。それを讀んだに違いない太宰は、このもっとも人気のある童話をあえて書こうとしなかったのだ。太宰の姿勢、あるいは世界観を、“白か黒か”で片づけることはできないのではないか。

こうした点を考えると、私自身の考えでは、『惜別』は、‘敢闘賞’に十分値する作品であると思う。それは、またあの荒涼とした焼跡に狂い咲きした一輪の薊といえようか。

## 注

- 1) 断りない限り、引用は初版（『太宰治全集』、7巻）による。また、本書からの引用はページ数のみとする。たとえば〔120〕のように。ただし、旧字体は原則として新字体に、仮名づかいも一部を除き、新仮名づかいに改めた。
- 2) 現代の天皇制は、皇国史観に直接、基づくものではない。むしろ明治20年代の前半に明治政府によって新たに創案され、その後確立した体制である。そこには明確な断続がある。帝国憲法討議の過程で、周知のように、イギリス、フランス型の議会制民主主義は否定され、伊藤博文によって起草された明治憲法は、ロレンツ・フォン・シュタインの助言に基づくプロイセン型の憲法であった。天皇制国家はこれに依拠し、全く新しく構築きあげられたのである〔藤田省三（1966）〕

なお「天皇親政が…維新の原動力となった」—この個所は、戦後の改訂にさいしても削除されずに、そのまま残されている。〔『惜別』、新潮文庫版、316～17〕

## エピローグ

いま19世紀末以降、つまり魯迅や藤野巖九郎が活躍した時代を大まかにふり返ってみると、日中関係にもさまざまな局面と変遷とがあった。日本は明治維新によって封建制の改革を計り、一足早く近代化＝西欧型モデルの導入にふみ出した。問題を孕みながらもこの改革は軌道にのった。それは清国にもインパクトを与えた。文化の関係と流れは、戦勝国から敗戦国ということに逆転した。中国でも改革を求める様々な思想や運動が生まれたが、頑迷な旧弊の根強い残存、さらに帝国主義列強の干渉と介入によって、困難と複雑さを増幅させる結果になった。日清戦争後にはこうした状況のなかで、日本が中国にとってモデルの一つにみなされた。とくに西欧文化に根ざすインフラストラクチャーを整備するという面では、そうであった。

しかし科学制度の廃止、海外留学生の派遣、さらに「文学革命」、「五・四運動」を経て、中国にも新しいインテリ層、中間層が次第に形成されてきた。こうして、彼らが土台になって日中間の文化・文学の交流は、一方的・垂直的なものから水平的・相互交流的なものへと移行しつつあったと言えるだろう。むしろ中国の場合はとくに初等教育をふくめて教育制度が整っていなかったこと、大企業の形成が遅れたことなどのため、新中間層は層としてごく薄いものであった。（参考までに断片的だが数字をあげれば、1922年の小学生数は、660万人、1931年には1172万人であり、就学率は、約30%程度にすぎなかった。むしろ教師の数も少ない〔狭間直樹ほか(1996)：30～31〕。

このような事情は当然、出版市場の成立、規模にも影響を及ぼす。かの有名な『新青年』の場合にも原稿料はなし。その他の雑誌の場合も原稿料はあったとしてもごく低かった。筆一本で立つのは困難であった。だから魯迅の例のように、大学の兼任講師のような副業をもつ必要があった。これは日本でも多かれ少なかれ見かけることだろう。他方、日本では維新後はやくから初等教育が整備され、就学率は高まり、文盲率は急速に低下した。高等教育の拡充も日本が先行した。このような条件は書籍、雑誌、新聞など出版市場の成長・拡大にも大きな格差をもたらしたと考えられる。

漱石、鷗外、芥川など日本の現代文学が中国に受容され、影響を与える時代のつぎに、逆に中国の現代文学が日本に移入され、受容される時代が始まった。つまり文学における相互交流、水平的

関係の時代の開幕である。

まず現代中国文学に対する日本側の関心は、ジャーナリズムを別とれば、アカデミズム内部とその周辺ではじまった。伝統的な古典文学ではなくもっぱら近現代文学を研究する研究会が竹内好ら東京大学支那文学科の学生およびOBによってが結成され（1934）、また倉石武四郎（当時、京都大学助教授）は30年代はじめごろ『呐喊』をはじめゼミのテキストに使ったという〔藤井省三（2002）〕。関心は大学の次元にとどまらない。なかでも『魯迅選集』が佐藤春夫・増田渉の訳で岩波文庫の一冊として出版され〔1935（昭和10）年〕、さらに2年後『魯迅大全集』全7巻が改造社から刊行されたことは大きい。いわば相互に交流し、影響し合う段階に入ったのである。

しかし、この新しい局面について論じることは、筆者の能力をはるかに超える課題であり、不可能である。ここでは代わりに、張競/村田雄二郎編のアンソロジー『日中の1200年 文芸・評論作品選』（2016）を紹介しながら、ごく大ざっぱなイメージを描くことで、締めくくりにしたい。

アンソロジーは5巻からなり、1は『共和国の夢 膨張の野望 1894-1924』、2は『敵か友か 1925-1936』、3は『毎日と抗日 1937-1944』、4は『断交と連帯 1945-1971』、5は『蜜月と軋み 1972-』という構成になっている。このシリーズでは文学者だけでなく、政治家、学者、ジャーナリストなど言論人の文章も採りあげられている。政治、戦争、事件、経済発展などによって、執筆者たちの論調もさまざまに変化している。このことは各巻のタイトルが適切に示唆していることでも解かる。戦争や破壊のときの好戦、野蛮、憎悪。そのような時でもけばけばしいスローガンが幅をきかせるなかで、友好、平和、温かい人間関係を求める声もささやかではあるが、絶えることはない。これも二千年にもおよぶ日中間の歴史のたまものであるうか。

最後の5巻で述べている陳舜臣の一文「『血で書かれた事実』はかくせない—歴史に照らして」一点だけを選び、それについて触れて、筆を擱きたい。魯迅を引用したこの文章は、天安門事件を歴史との関わりで論じたものである。

「六月四日の流血事件は、私には七十年前の五・四運動の続きにみえる。この運動の「二つの大きなスローガンは「反帝国主義」と「反封建」であった。…/「反帝国主義」は日本の敗戦によってほぼその目的が達成されたといってよい。一方、…「反封建」はなおざりにされてきたような気がする。…反封建はすなわち「民主」をめざすものである。…天安門広場に「民主化要求の声」が挙がったことは、これが五・四運動のつづきであることを物語っている。」〔張競・村田、5：156～163〕

魯迅は随想「私は人をだましたい」〔全集8：544〕で、真実を自由に語り、表現できない状態を痛烈に批判した。彼が希求したと思われる民主的な社会は、思想、表現、報道の自由な社会、人をだまさなくてもよい社会であり、いまだそれは実現されてはいない。だが、これは戦時体制下の問題だけでも、中国だけの問題ではない。現在、情報技術などの新技術はグローバルに、人間の生活様式を大きく変え、すべてを便利なもの、効率化を優先させる方向に向かわせた。同時に、それは権力者が人々を管理し、彼らの好む一定の方向に誘導し、支配することを容易にする。文学もまたその影響のらち外にあるわけではない。そのことをわれわれは銘記すべきではなからうか。

≪ 参考文献 ≫

- 芥川龍之介 (1918) 「毛利先生」、『芥川龍之介全集』、(1998) 4 卷、岩波書店  
同 (1996) 「桃太郎」(初出、1924)『芥川龍之介全集』、11 卷、岩波書店  
同 (1997) 「恒藤 恭君への手紙」、『芥川龍之介全集』、17 卷、岩波書店  
阿部兼也 (1999) 『魯迅の仙台時代—魯迅の日本留学研究』、東北大学出版会  
石川禎浩 (2010) 『革命とナショナリズム 1925—1945 中国近現代史③』、岩波新書  
今村与志雄 (1990) 『魯迅の生涯と時代』、第三文明社  
白見吉見 (1968) 「『木曾義仲論』をめぐって」、『現代日本文学大系 43 芥川龍之介集』、所収、筑摩書房  
奥野健男 (1973) 『太宰 治』、文芸春秋  
尾崎秀樹 (1971) 『旧植民地文学の研究』、勁草書房  
川村 湊 (1991) 「『惜別』論—「大東亜の親和」の幻」、『国文学 解釈と教材の研究』、36 卷 4 号所収  
北岡正子 (2001) 『魯迅 日本という異国文化のなかで 弘文学院入学から「退学」事件まで』、関西大学出版部  
木山英雄 (1978) 『北京苦住庵記 日中戦争時代の周作人』、筑摩書房  
工藤貴正 (2010) 『中国語圏における厨川白村現象 一隆盛・衰退・回帰と継続—』、思文閣出版  
小山三郎・鮑耀明 (2011) 『魯迅 海外の中国人研究者が語った人間像』、明石書店  
斉藤利彦 (2014) 『作家太宰治の誕生 「天皇」「帝大」からの解放』、岩波書店  
桜井 毅 (2005) 『出版の意気地 櫻井均と櫻井書店の昭和』、西田書店  
三宝政美 (1988) 『悩める家長 魯迅』、日中出版  
柴崎信三 (1940) 『魯迅の日本 漱石のイギリス』、日本経済新聞社  
周 作人 (1940) 『瓜豆集』、松枝茂夫訳、創元社  
同 (1973) 『周作人 日本文化を語る』、木山英雄編訳、筑摩書房  
竹内 好 (1961) 『魯迅』、未来社。初版は 1944 年に日本評論社から出版  
同 (1980) 『竹内好全集』第 1 卷所収、「藤野先生」(1946 初出)、筑摩書房  
太宰 治 (1945) 『惜別 医学徒の頃の魯迅』、朝日新聞社；同 (1980) 『太宰治全集』、7 卷、類聚版、筑摩書房  
同 (1976) 『太宰治全集』、1~13 卷、筑摩書房  
同 (1999) 同 13 卷、(草稿) 筑摩書房  
同 (1992) 同 別巻 (山内祥史編集) 筑摩書房  
脹競 / 村田雄二郎編 (2016) 『日中の 120 年 文芸・評論作品選』全 5 卷、1 卷『共和国の夢 膨張の野望』、2 卷『敵か 友か』、3 卷『侮中と抗日』、4 卷『断交と連帯』、5 卷『蜜月と軋み』、岩波書店  
恒藤 恭 (1940 ; 1984) 『旧友芥川龍之介』、朝日新聞社；復刻版、日本図書センター  
東郷克美 (2005) 「無用の用—『惜別』の位相」、山内祥史ほか編『二十世紀旗手・太宰治—その恍惚と不安と—』  
所収、和泉書院  
徳永重良 (2015) 「藤野巖九郎と魯迅をめぐって—「惜別」：その前後—」、『人文社会科学論叢』24 号  
同 (2016) 「魯迅と藤野巖九郎をめぐって—日中関係の一齣—」、『人文社会科学論叢』25 号  
同 (2018) 「魯迅と藤野巖九郎について (続) —日中関係の一齣—」、『人文社会科学論叢』27 号  
狭間直樹・岩井茂樹・森時彦・川井悟 (1996) 『データでみる中国近代史』、有斐閣  
藤井省三 (2002) 『魯迅事典』、三省堂  
同 (2011) 『魯迅—東アジアを生きる文学』、岩波新書  
同 (2015) 『魯迅と日本文学 漱石・鷗外から清張・春樹まで』、東京大学出版会

- 藤田省三（1966）『天皇制国家の支配原理』、未来社  
 北京魯迅博物館（2003）『魯迅的読書生活』、[写真集]、人民日報出版社  
 増田 渉（1967）『中国文学史研究 —「文学革命」と前夜の人々—』、岩波書店  
 同 （1970）『魯迅の印象』、角川書店  
 丸山 昇（1976：1997）『ある中国特派員 山上正義と魯迅』、中央公論社：改訂版、田畑書店  
 劉 岸偉（1991）『東洋人の悲哀 周作人と日本』、河出書房新社  
 同 （2011）『周作人伝 ある知日派文人の精神史』、ミネルヴァ書房  
 魯 迅（1984～86）『魯迅全集』、1～20 巻、学習研究社、同「私は人をだましたい」、〔『全集』、8：544～550〕

〔付記〕：小論を草稿の段階で、目を通し、有益なコメントをして下さった富田義典氏に心からお礼申し上げる。

### 訂 正 表

該当箇所	誤 記	→ 訂 正（または補足説明）
- 論文（2015）、（「藤野巖九郎と魯迅をめぐって—「惜別」：その前後—」、24 号所収） 該当ページ： 行（上または下から）		
117：11 行（下から）	「藤野先生」の原稿	…原稿（ただしコピー）〔実物は北京魯迅博物館所蔵〕
127：10 行（下）	創造と模倣	創造的模倣
128：（10 行）（上）	作家の貴司山治は	「作家の貴司山治は」を抹消し、「元患者の坪田和雄、地元新聞の記者川崎義盛、牧野久信ら 3 人は…先生の診療所を訪れ…」
131：16 行（下）	4 名	6 名
132：10 行（下）	半沢正二郎…所収	『仙台における魯迅の記録』（1978） 371～373 ページに所収、仙台における魯迅の記録を調べる会編、平凡社
- 論文（2016）、（「魯迅と藤野巖九郎をめぐって—一日中関係の一齣—」25 号所収）		
7：16 行（上）	「日曜版のようなものか」を抹消する。	〔補足説明〕：1918 年、李大釗、ついで孫伏園が編集者となり、『晨报副刊』は 1921 年以降、リベラルな性格の文芸、思想の日刊紙（4 ページ）になった。
9：7	文	文（または文子）
- 論文（2018）、（「魯迅と藤野巖九郎について（続）—一日中関係の一齣—」27 号）		
47：12（本文、下から）	「中国のゴゴリー」	「中国のゴールキー」
48：2（本文・下から）	もう一度に	もう一度
58：下から 2 行目に、以下の文献を追加・挿入する。 徳永重良（2015）「藤野巖九郎と魯迅をめぐって—「惜別」：その前後—」、『人文社会科学論叢』、24 号 同 （2016）「魯迅と藤野巖九郎をめぐって—一日中関係の一齣—」、『人文社会科学論叢』、25 号		